

データサイエンス研究の創刊にあたって

立正大学データサイエンス研究所 所長 西崎文平

このたび、立正大学データサイエンス研究所の紀要として、「データサイエンス研究」の創刊号を発刊いたしました。

近年におけるデータの蓄積と分析技術の発展は目覚ましく、データに基づく知識発見とイノベーションの促進、生産性の向上への期待は大きく高まっています。もっとも、その期待は、分析の結果が企業などの意思決定、実際の行動につながり、それが新たなデータ収集にフィードバックされる仕組みのもとではじめて現実のものとなります。しかし、我が国の多くの組織では、現状維持、短期志向、部分最適といった従来からのバイアスの壁は厚く、データの重要性は認識されながらもそれを活かしていません。そこでブレイクスルーとなるのは、企業活動などの現場で日常的な業務に携わりながら、データに基づいて説得的な提案を行い、経済価値を創造することができる人材であり、その大規模な養成が求められています。

立正大学データサイエンス学部は、こうした要請に応えるために設立され、データ分析の手法と応用対象となる各分野の知識を学び、そのうえでデータの実践的な利活用を習得できるカリキュラムを提供しています。教員は第一線のデータ人材を育成するという使命感は共有しつつ、様々な応用分野に対応すべく、経済、経営、地理、気象、観光、法律、会計、スポーツなどその専門は多岐にわたっています。そして、これらの教員を中心とした研究活動を支援し、交流・連携を促進するための場として、当研究所が設置されています。学際性はデータサイエンスの魅力の一つであり、当研究所における多様な分野の交流の可能性はイノベーションに向けた好条件であると考えています。

本誌の名称に関してはいくつかの案を検討しましたが、あえてストレートに「データサイエンス研究」と決めました。これは、「データサイエンス」の範疇にあてはまりそうな論文を重点的に掲載するという趣旨ではありません。むしろ、研究所のメンバーが関連分野の研究も含めて自由に研究を進める中で、結果として「立正大学のデータサイエンス」の輪郭が浮かび上がってくればよいのではないかと考えました。また、分野の幅広さから、論文のスタイルなどが大きく異なる場合も想定されますが、各分野の作法をできるだけ尊重し、体裁面での統一は最小限にとどめることとしました。

本誌がデータサイエンス、および関連分野の発展にとって少しでも参考になれば幸いです。